
当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

「アフロ・ユーラシア地理言語学研究」2025 年度第 1 回研究会（通算第 1 回目）

日時：2025 年 4 月 20 日（土）13:00–17:00

場所：オンライン会議室

使用言語：日本語

共催：AA 研基幹研究「アジア・アフリカの言語動態の記述と記録：アジア・アフリカに生きる人々の言語・文化への深い理解を目指して」(DDDLing); 科研費・国際共同研究加速基金（国際先導研究）「「時空言語学」の創成：地理と歴史を融合した言語の変化と発展への新たなアプローチ」（研究代表者：菊澤律子（国立民族学博物館）、課題番号：24K23937）

報告タイトル

1. 白井聡子（AA 研共同研究員，東京大学）

「研究計画について」

本研究計画の趣旨および具体的な手法と計画をプロジェクトメンバーと共有した。本研究の目的は、ミクロ・マクロ両面にわたって、言語に反映された人々の交流のダイナミクスを明らかにすることである。手法としては、言語特徴の分布解釈地図を作成して地理分布を求め、その形成過程について通時的分析および類型論的考察をとおして解明する。言語外の要因、すなわち言語接触の背景にある人類集団の移動や交流についても考慮に入れ、隣接領域の専門家も随時招聘して検討を行うこととする。地図作成に当たっては、主に系統的グループごとに色分けをすることで、地理的分布の系統的要因と地域的要因を検討できる。色分けの改善点など研究実施上重要な事項に関しては、引き続きメール会議を重ねることとした。

2. 倉部慶太（AA 研）

「地理言語学と言語類型論データベース」

地理言語学と言語類型論は異なる分野であるが、いずれも言語変種を対象とし、共通点も少なくない。本発表では、本地理言語学プロジェクトに関連する研究動向のひとつとして、言語類型論データベースの種類や設計上の違いについて整理した。データベースは、対象範囲（広域型か地域・語族特化型か）や扱う言語現象の範囲（総合構造型か領域特化型か）など、さまざまな観点から分類できる。また、データの記述形式（構造化データ中心か記述情報中心か）やデータの収集方法（文献調査や記述文法の集約か共通の質問票に基づくコンソーシ

アム方式か)などの観点も挙げられる。記述単位(言語、構文、表現)と設計原理(単一分類型、複数分類型、構造的分解型)にも違いがみられる。近年の言語類型論データベースは、Cross-Linguistic Linked Data (CLLD) および Cross-Linguistic Data Formats (CLDF) といった共通の枠組みと仕様に基づいて設計される傾向が強まっている。

3. 福嶋秩子 (AA 研共同研究員, 新潟県立大学名誉教授)

「『月』の地理言語学的研究: LAA『太陽』の分析を参考に」

本プロジェクトの最初の項目として「月」をとりあげることになったので、『アジア言語地図』における「太陽」の分析をふりかえった。「意味の拡張と分化」の観点から「太陽」の地図をあらためて作製した。「太陽」の名称が「日」の意味ももつところがアジアの広い地域に分布していることがわかった。また、「空・天」「暑い」「時間」という語源的動機づけ(etymological motivation)と考えられるものもあった。「太陽」と「日」を意味する多義から「太陽」のみを表す単義への変化が多く、言語・言語群で起きていることがわかった: 例①: 日本語や中国語では、「ひ」や ri などの多義の単音節語から「太陽」のみを表す二音節語・複合語へ、例②: オーストロネシア語族では、「日」や「光」を表す語から mata (目)とその複合語へ、例③: チュルク語派では、kün から küneš へ。「ヨーロッパ言語地図(ALE)」の解説を参照すると、名称に注目した地図 (onomasiological map) と意味に注目した地図 (semasiological map) があり、前者であっても意味に配慮した分類がなされることがあることや、命名の動機づけ (motivation) の地図化の典型例は複合語が多い「いなご・ばった」や「虹」であることがわかった。また、「月」の解説で、‘moon’の意味か‘month’の意味かについての情報が不足しているということが述べられていた。以上から、本プロジェクトにおける「月」の地図化にあたって以下の点をお願いする: 名称を集めるとき、意味や語源、語形成についても確認する。‘moon’ ‘month’ ‘moonlight’ などの意味があるか確認する。二つ以上の語がある時はどんな違いがあるか確認する。名称の地図を作成するときに、意味(命名の動機づけ)にもとづく分類を行ってもよい。有用な情報は発表時の PPT スライドで示すか解説で示す。また、「太陽」についての新しい情報や私の分析の間違いに気づいたら教えてほしい。

4. 担当言語群紹介

本プロジェクトに関わる共同研究員および研究協力者 39 名 (内 3 名欠席) が、それぞれの担当言語群の概要を述べ、本プロジェクトを進めるに当たっての前提知識と問題点を共有した。

5. 鈴木博之 (AA 研共同研究員, 京都大学)

「地図作成・出力についての紹介と技術的問題」

本発表では、ArcGIS online の新 Map Viewer からどのように地図を画像として取り出し、

本プロジェクトの言語地図として利用するかの方法論的・技術的問題について取り上げた。新 Map Viewer では、これまでのスクリーンショットによる画像取得以外に、pdf として高解像度で出力できることを紹介した。pdf での出力を行うと、成果物としての出版用として再度編集が必要になる点を示し、地図、凡例、著作権情報の取り扱いについて注意喚起した。地図を画像化した後の編集の手順も紹介し、今後プロジェクトを進めていくうえで必要な技法を共有した。